

藤田宜永

(講評) 近松賞に輝いた『大阪新町はすかい慕情』は素晴らしい作品でした。文章、構成、描写、展開……どの点を取り上げても群を抜いていました。この世話物に出合えたことを、選考委員のひとりとして大変喜んでいきます。

他にも優れた作品が何編もありました。現代物でも上手なものに触れることができ、学生の作品には初々しさを感じました。

鯖江に関するものを入れるという“シバリ”は足かせにはなりません。小説空間にどう馴染ませるかが問題なだけです。とはいうものの、着物、漆器などの伝統工芸品は先例もあるので小説に向いていて、眼鏡はちよつと難しいかもしれませんが、却って、挑戦しがいがあるというものです。

鯖江の眼鏡の歴史を取り上げることできます。当地の工房に足を運べば、職人やデザイナーにも会えます。製品にこだわらずとも、眼鏡と恋を結びつけて柔らかい話が書けるはずです。県外からの応募者にはハインデイがあると思うかもしれませんが、否、否、否。眼鏡に限らず、初めて目にするものは、地元の人たちよりも新鮮に感じ、作品を産み出す原動力になることは珍しくありません。駄ジャレを言う気はありませんが“近視眼”的にならず、近松賞に新たな風を送りこんでください。